

令和5年11月6日

京口門だより No. 121

立冬(8日)近くになっても夏日があるこの頃です。気候も世情も異常続きで本来の季節の変化が巡ってきませんし、悲惨な戦争も止む気配がありません。ご自分の健康には充分注意を払っていただきたいと思います。「立冬やつめたき柿を掌にしたる」(瀧春一)

本来なら寒気がおとずれ風邪などひきやすくなります。何回か漢方の風邪対策については書いてきましたが、この季節に当って漢方の風邪の治療を述べてみたいと思います。

現代医学や市販薬で一般に風邪薬を調べてみますと、いろいろな作用をもった万能薬のようなもので、熱を下げる作用、痛みを除く作用、炎症を治す作用、アレルギーを防ぐ作用、咳を止める作用、痰を除く作用など、風邪治療に必要と考えられるさまざまな作用をもった薬が作られています。

風邪症状は人によってまたその時間の経過とともに変化してゆくもので、頭痛や寒気から起る人も、始めは鼻水が出てくる人もあれば、いきなり咽の痛みから起ったり、体の節々が痛むという場合もあるでしょう。また寒気から急に高熱が出たり、咽の痛みから咳が強くなるような場合もあるでしょう。万能薬のような風邪薬で対処しようとするのは無理な点があります。

一方漢方では起こっている症状や時間の経過によって、さまざまな対応ができるようになっていきます。風邪の初期は寒気や頭痛がしたり、節々が痛いなどがあり、葛根湯や麻黄湯が適応します。しかしこれは風邪の初期だけで、発熱して咽痛や咳が起こり、食欲がないという症状が起こってくれば、柴胡の入った小柴胡湯や柴胡桂枝湯といった薬が用いられるようになります。あるいは熱があるのに寒気だけするというような場合に麻黄細辛附子湯が用いられます。あるいは高熱とともにいろいろな症状が出てくる場合、咳がひどく止まらないなど、それぞれに適した薬がいくつもあります。

ですから一般の風邪薬のように葛根湯を何日も続けて飲むことなどありません。症状や時間の経過とともに用いる薬は変わってきます。すなわちケースバイケースで治療法が違ってくるのです。

当診療所には代表的な風邪薬の使い方の説明書があり、お渡しできます。

